薬師寺
北面回廊・講堂発掘調査（平城宮跡第２１８次調査）
現地説明会資料

1990.08.04
島田 敏男

薬師寺
奈良国立文化財研究所
平城宮跡発掘調査部

薬師寺では、金堂、西塔、中門、僧房などの再建にひき続き、回廊、講堂を復興する計画がある。今回は北面回廊の柱位置の確認と、講堂の規模確認を主目的として調査を行なっている。調査は７月５日より開始し、現在も調査進行中であるが、これまでにわかったことを報告したい。なお、調査面積は約７００㎡である。

薬師寺講堂と回廊の歴史

和銅三年（７１０）	平城遷都	「続日本紀」
養老年間～天平年間	平城薬師寺造営	
天禄四年（９７３）	食堂より出火し、講堂・回廊・中門・南大門・僧房・経蔵・鐘楼等を焼失。（金堂・東西両塔は免災）	「薬師寺縁起」
天禄四年（９７３）	諸堂宇の再建を各国に分担させる。	「薬師寺縁起」
貞元三年（９７８）	仮葺講堂で最勝会をおこなう。	「薬師寺縁起」
１１世紀はじめ	この頃回廊完成。	「三十六歌仙伝」
永長元年（１０９６）	地震により回廊が倒れる。	「中右記」
康安元年（１３６１）	回廊・中門・西院倒壊する。金堂・東西両塔破損する。	「嘉元記」
享禄二年（１５２９）	兵火により、金堂・講堂・西塔・中門・僧房を焼失。	「薬師寺誌」

以上のように、奈良時代に建てられた講堂と回廊は、天禄四年に焼失し、その後に両建物とも再建されるが、回廊は康安元年に倒壊し、講堂は享禄二年に焼失する。

調査位置と過去の調査

調査位置は現在の講堂の東方に位置し、奈良時代の伽藍では講堂の東１／４と北面回廊にあたる。北面回廊については、昭和４３年～昭和４５年にかけて、北面回廊東半分の基壇北端を確認し、昭和６０年には回廊東北隅部の基壇端と柱位置を確認している。また、東面回廊・西面回廊・南面回廊についても数度の調査を経て、その全容が明らかにされつつある。講堂については、昭和４３年～昭和４５年にかけて講堂基壇東北隅と東南隅を確認し、基壇規模が判明している。

回廊・講堂におけるこれまでの調査による所見は以下の通りである。

○回廊

① 回廊は当初単廊で計画され、礎石据付まで工事が進むが、工事途中で計画が変更され、複廊が造営される。

② 単廊の柱間寸法は桁行・梁間とも12.5尺である。

③ 複廊の柱間寸法は昭和62年の『薬師寺発掘調査報告』では、梁間は10尺等間とし、桁行方向は南面で13.5尺等間（中門取り付きを含めた二間は12.5尺）、東面および西面は、単廊計画段階における南北心々距離362.5尺から換算し、一間は13.7尺であったと考えられていた。しかし、平成元年に行なわれた東面回廊の調査により、部分的に柱間寸法の長短があることが判明し、東面回廊では桁行柱間寸法は基本的には１.４尺とし、部分的に柱間寸法の長短をもたせ、回廊の全体規模を単廊計画段階の規模（心々距離）に合わせていた。

④ 複廊の基壇高はおよそ90cmに復原できる。

⑤ 昭和６２年度の東面回廊の調査では、回廊が12～13世紀に火災をうけた痕跡を確認した。

○講堂

① 基壇規模は東西143.5尺（42.5m）、南北75尺（22.2m）である。

② 柱間寸法のうち桁行方向は中央の５間を15尺、脇の２間ずつを12.5尺、梁行方向は、中央の２間を15尺、脇間を12.5尺、裝階の出を6.25尺と想定する。すると、桁行全長が137.5尺、すなわち単廊の一間12.5尺の１１倍、単廊東西全長の１／３となり、単廊と関連して計画されたと考えることができる。

調査の成果

○回廊　従来の見解通りに単廊の礎石据え付け穴と複廊の礎石据え付け穴を検出した。

単廊は東北隅の入隅の柱筋からから数えて６間分を確認した。柱間寸法は桁行、梁間とも12.5尺である。

複廊は東北隅の入隅の柱筋から数えて７間分、つまり回廊東北隅から講堂から２間面までを検出した。柱間寸法は桁行13.5尺、梁間10尺等間である。なお、講堂から１間目の柱筋は検出できなかった。講堂から１間目の柱筋の礎石据え付け穴は後世に削られてなくなったと考えられ、講堂から１間目の柱筋の礎石据え付け穴の底が、講堂から２間目の礎石据え付け穴より高かったと推定される。したがって、講堂から１間目の柱筋での基壇上面は、講堂から２間目の柱筋での基壇上面より高かったと推定される。すなわち、講堂から２間目の柱筋付近から、回廊基壇上面が斜面となって講堂基壇面に取り付いていたと考えることができる。

基壇端は部分的凝灰岩地覆石が残っており、従来の見解どおりに基壇の出は柱心から6.5尺であることを確認した。雨落溝は回廊の南北とも、攪乱によって明確ではない。発掘区西方の回廊基壇の南では２列の玉石列を検出した。この石列の間が回

廊の雨落溝と考えられる。ただし、この玉石列が創建当初のものか、それとも天禄再建時の改修によるものかは、今後の調査に結論を残す。

○講堂

講堂の東妻から西へ３間分の礎石据え付け穴および礎石抜取り穴を検出した。裝階以外の礎石据え付穴は一辺が約２ｍの方形で、一部の礎石据え付穴には根石が残存していた。桁行方向の柱間寸法はは端から10尺・15尺、梁間方向は中央二間が17尺、脇間が10尺ととることができる。裝階の礎石据え付け穴は、旧基壇が最も残りの良い発掘区西北で検出したが、他では検出できなかった。礎石が小さなため、礎石据え付穴も浅く、削平されたと考えられる。裝階の出は、６尺～７尺ととることができ、従来の見解通り6.25尺とすることができる。伽藍中軸線で今回の発掘成果を折返し、未発掘地の柱間寸法を推定すると、裝階を除く規模は、桁行方向は９間で中央７間が15尺等間、両端間が10尺、梁行方向は、４間で中央２間が17尺、両端間が10尺となる。裝階を除く全体規模は桁行方向が125尺、梁行方向が54尺となり、「薬師寺縁起」の記事（長十二丈六尺　広五丈四尺五寸）とほぼ一致する。

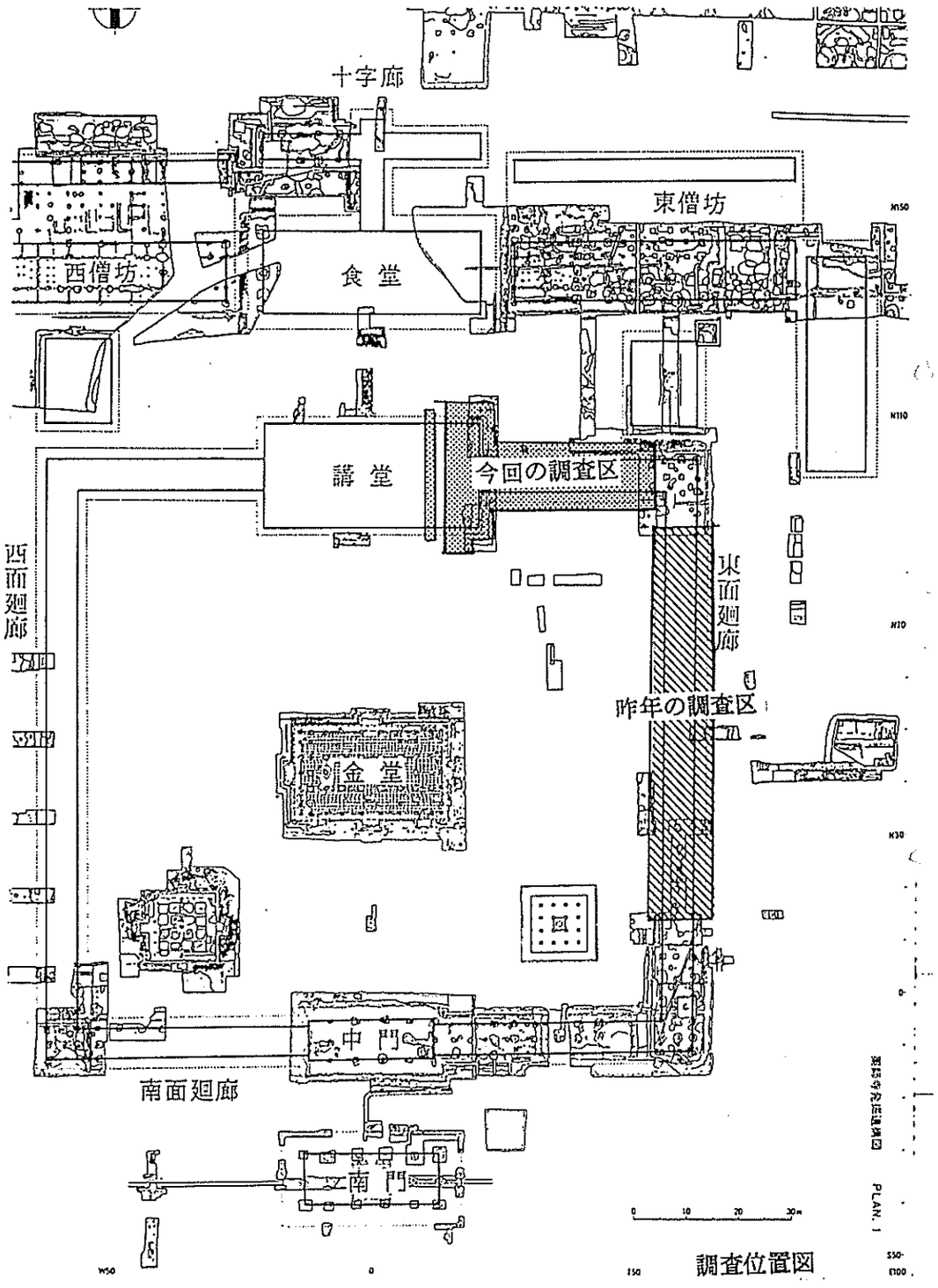
講堂の南北で凝灰岩の基壇地覆石を検出した。南北の側柱の中心から地覆石の外側まで、約10尺である。地覆石の断面は中央がへこんで、溝状になっており、ここに羽目石が立っていたと考えられる。

また基壇の南面・北面で階段を検出した。階段の東端は、ほぼ柱筋に揃っている。地覆石の外面からの階段の出は約１ｍで、階段の幅は約15尺（4.5m）と推定される。基壇の北面では階段の北延長位置に、北に延びる道路状の敷石を検出した。かつて講堂の北面中央を調査した時にも、中央に階段を検出し、その階段幅で北へ延びる敷石遺構を検出している。なお、敷石の東端は、階段の東端揃っているが、敷石の幅は約10尺で、この敷石は柱間の真中には位置しない。当初からこのような計画であったのか、それとも当初は柱間の幅（15尺）としていたが、後世に西側の敷石が取り除かれたのかは、今後の調査に結論を残す。基壇の南と東面の回廊取り付き部の南側では、基壇から90cm隔てて玉石列を並べた溝があり、雨落溝と考えられる。雨落溝の幅は約70cmで、基壇と雨落溝間に犬走りを設けている。したがって、軒の出は14尺もしくは15尺に復原できる。

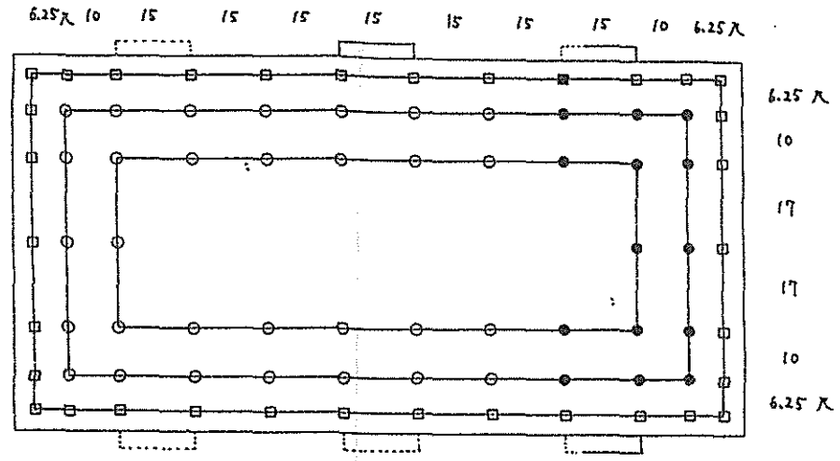
○講堂と回廊の取り付部分

創建時はさきに述べたように、講堂のきわで回廊基壇上面を斜面として、講堂と回廊の基壇高の差を処理していたと考えられる。

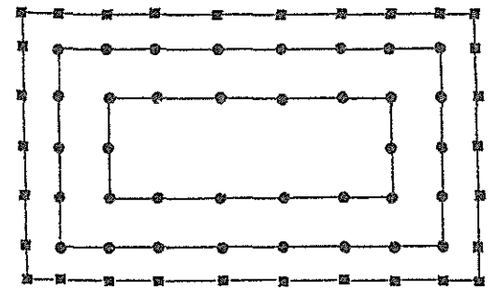
また、回廊が講堂に取り付位置に凝灰岩を検出した。この凝灰岩は、創建回廊の推定基壇上面より低い位置にあり、この凝灰岩が創建時に据えられたものとすると、基壇土のなかに埋まってしまう。したがって、この凝灰岩は、天禄年間再建の回廊が康安元年に倒壊した後に、講堂の基壇東端を改修したものと考えられる。



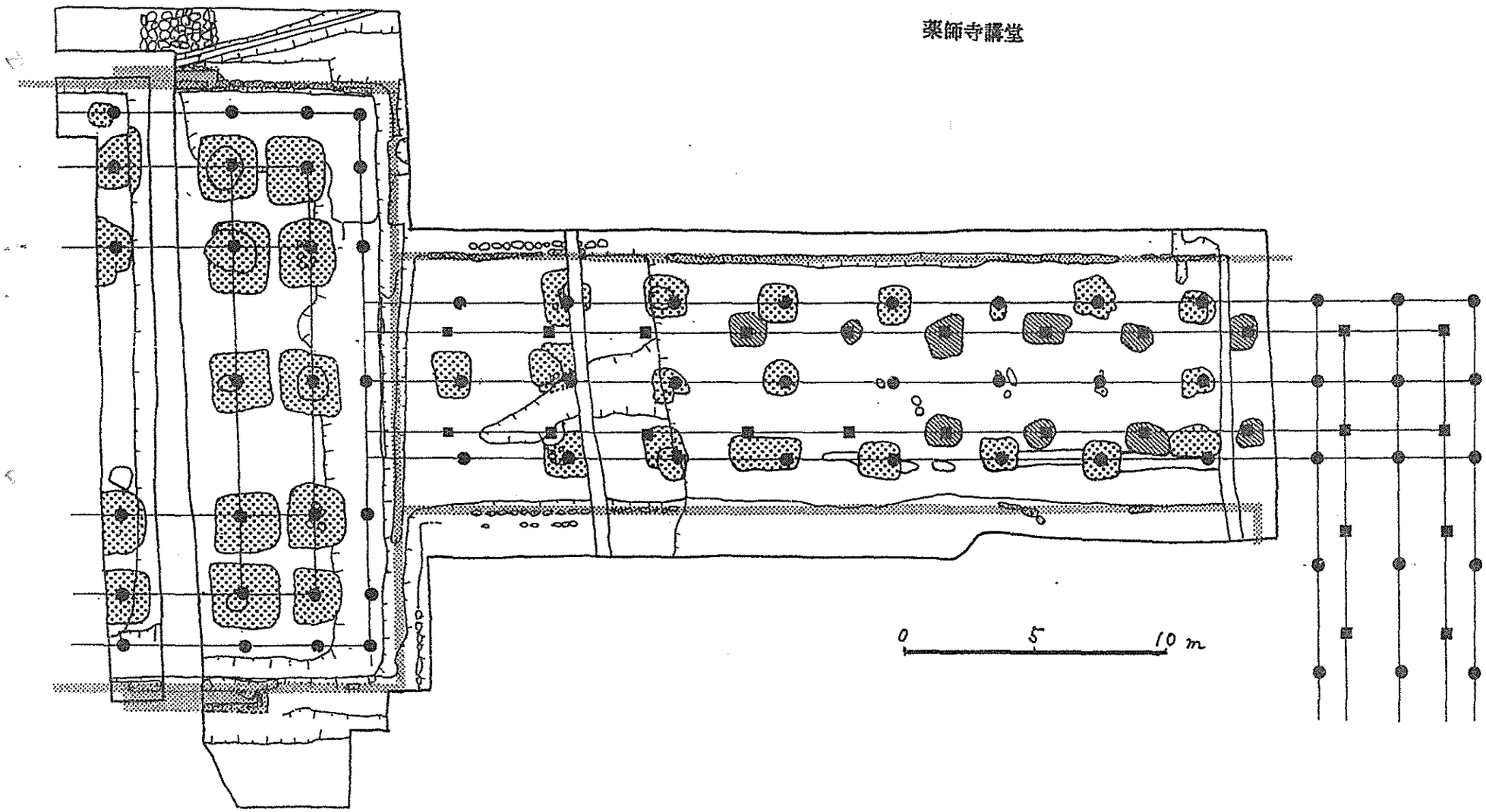
調査位置図



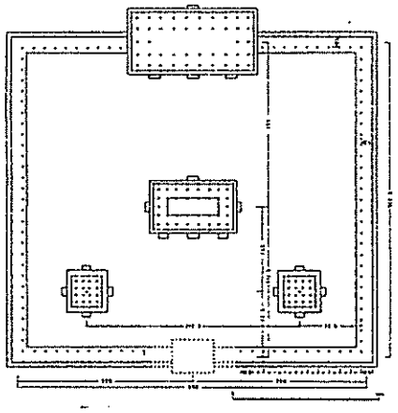
薬師寺講堂



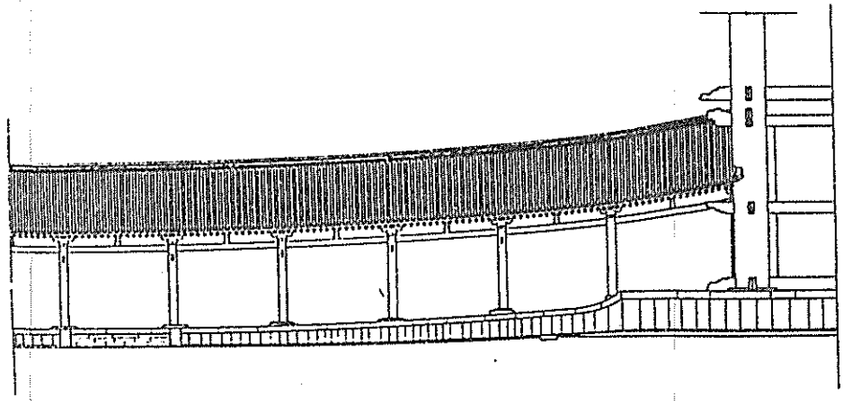
薬師寺金堂



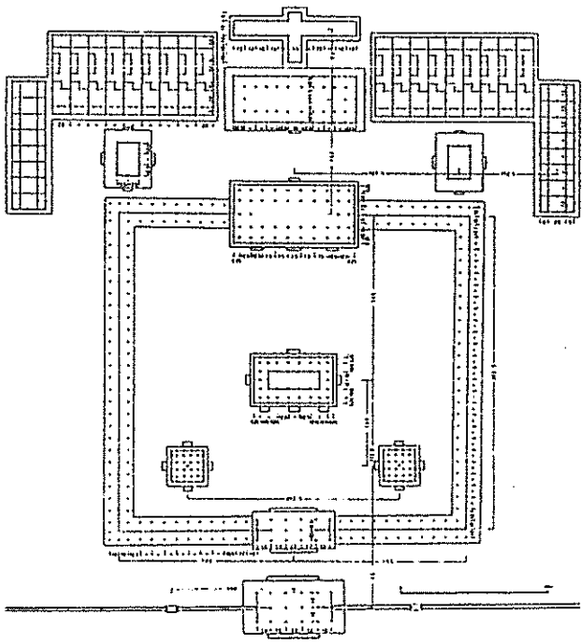
遺構図



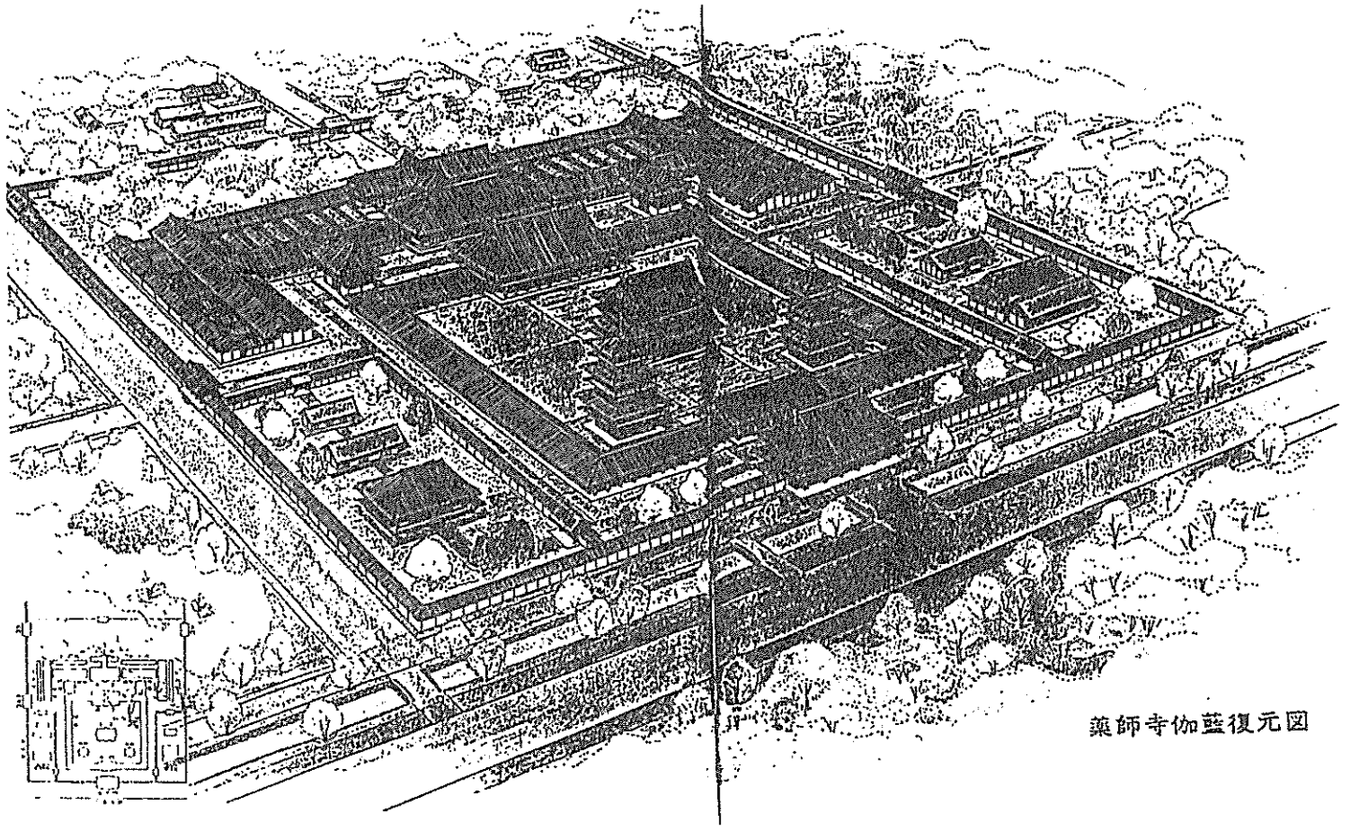
薬師寺伽藍配置図（単廊による想定計画図）



東大寺金堂・回廊取り付き部分



薬師寺伽藍配置図



薬師寺伽藍復元図